

安政見聞錄

下

129
6
3



江戸守城の良將數三十六ヶ所あり
一
之の心を表して何より破れ共なる也
其の四谷口の櫓へ原根より不破不
通と云ふあらわなるがとくと
堅固さと城門ふたとてのうをかね
あくさるるを以震動の速と知
改ふ太子東方馬場而渕門よりは累次
其の内に放逐せざとて大破せず
榮を元より社下に祀る
有と確今後のがとく成るときもそ九
時入國より之をめぐらす



そまと高き不界

一葉あ
井絵写

アモ地下どううふの眼

眩暈き足喬木見まよりち

心ふ若あてあすへんみ

一余ふ及ぐこ極まどあふやゑ不

ふ心身懶懶するくあふら然の

大夏を擧きさし寂すまの

けふすゑは門お葉ひる

石垣千尋余る垣ハ垣

音頽蕪又を衰て枯槁ると

吟トすたねり枝碎け根伏る

枯葉ふ拂う廻聞ふ吟へ切不

えんも葉を亂して搖るゝ或ハ中市か

ぬけかりて今ふもあきだ上えり

萬がくべき形勢へえあるも

餘りあくすれんと

きり不是も如人返る身

みてえ來すと嘆せる人の

よ終ととす桜等へて陵

世のゆの持不持さんと

令魏文



被換者不^レ多^一 △鑑見被換者武家町大被換△多田瀬場院八幡社社主
日被換丁里庄丁改代丁方門丁小日向をと大被換者不^レ中里丁矢床下和
赤城つる丁ち丁童丁大被換白近丁の耳^レ引^レと被換者不^レ多^一
牛^レ外^レ野子坂^レ春例被換者^レ日不^レあ方^レ西^レ島^レ方^レ内^レ東^レ
丁山祐丁村^レ多^一丁日不^レ組^レ大被換不^レ多^一△市若^レ外尾別換^レ方
西方^レ内^レ側^レ丁加賀^レ大被換^レ多^一△市若^レ内^レ東^レ方^レ内^レ東^レ
門田^レ庄大^レ保^レ此^レ櫻^レ鷹^レ松^レ換^レ少^一△日被換^レ平^レ
乾^レ丁万年極^レ櫻^レ白^レ溫^レ生^一△本村丁^レたんま子^レ海^レ丁大被換^レ平^レ
津^レ雪^レ換^レ丁^レ不^レ多^一△傳^レ丁被換^レ一^レ△塙丁大被換^レ不^レ多^一△大手^レ
あ方^レ西^レ内^レ後^レ所^レ富^レて内^レ後^レ所^レ不^レ多^一△被換日^レ方^レ正^レ切^レ日^レ組^レ
屋^レ發^レ方^レ大^レ被換^レ△吟^レ遠^レ外^レ駿^レ大^レ被換^レ日^レ方^レ大^レ高^レ丁^レ被
△赤被換^レ外^レ紀^レ別^レ換^レ泰^レ日^レ不^レ轉^レ櫻^レ仲^レ丁^レ大^レ被
△櫻^レ破^レ參^レ面^レ方^レ大^レ被換^レ不^レ多^一△六^レ石^レ過^レ櫻^レ少^レ修^レ不^レ長^レ被換^レ島^レ不^レ
△高^レ山^レ武^レ家^レ民^レ大^レ被換^レ不^レ多^一△原^レ富^レ日^レ△才^レお天^レ山^レ被^レ換^レ多^一△西^レ古^レ
山^レ高^レ大^レ被換^レ不^レ多^一△塔^レ内^レ妙^レ法^レ本^レ空^レ失^レ不^レ大^レ被換^レ△赤被換^レ日^レ方^レ牛^レ
鳴^レ櫻^レ黑^レ鐵^レ若^レ大^レ被^レ換^レ不^レ多^一△長^レ老^レ山^レ被^レ換^レ不^レ多^一
△新^レ市^レ日^レ庄^レ比^レ吉^レ被^レ換^レ△今^レ井^レ石^レ被^レ換^レ△六^レ本^レ木^レ山^レ不^レ多^一△移^レ大^レ
武^レ家^レ町^レ家^レ不^レ尚^レ△井^レ櫻^レ山^レ被^レ換^レ△塙^レ吉^レ山^レ不^レ多^一△漏^レ池^レ大^レ被^レ
坂^レ上^レ大^レ被^レ換^レ△布^レ云^レ不^レ丁^レ大^レ被^レ換^レ△辰^レ龍^レ被^レ換^レ△漏^レ池^レ大^レ被^レ換^レ燒^レ蓑^レ辟^レ
柳^レ生^レ不^レ多^一△乃^レ人^レ被^レ換^レ不^レ多^一△日^レ玉^レ不^レ動^レ不^レ多^一△美^レ月^レ被^レ換^レ△白^レ蘿^レ
丁^レ大^レ被^レ換^レ△瑞^レ不^レ多^一△門^レ大^レ丁^レ被^レ換^レ不^レ多^一
△虎^レ山^レ外^レ豪^レ被^レ換^レ不^レ多^一△阪^レ谷^レ村^レ日^レあ^レ方^レ目^レ被^レ換^レ△あ^レの^レ保^レ大^レ被^レ換^レ
家^レ不^レ多^一△かせん^レが^レ若^レ大^レ被^レ換^レ武^レ家^レ不^レ多^一△阪^レ谷^レ丁^レ大^レ被^レ換^レ不^レ多^一

○今後の大震にて被災の種々

ハアラ坂下葉井丁の櫻井

の家まで下西方朴明並みて

三番丁門前丁ハ二日の夜あ

の大震が大通へ倒落あまの

本尾みて山のあたふれらえ

安東のからうーと各町たの壁

かくまよう被災の下すりて

怪我せー人ひきよまびへ

屋根の下すり根を突て下わの

ひきよもけで曲がりを伝又朴明

焼内へと破損の車社ハ

安東は南房七郎丁門前中川番

丁のあらすじ初搖籃をめ破損み無

ほ家へおー總て火災の事ーを失

れ外すても底下最強一地震不崩

きてももふあらすじ初搖籃といふと

今後あい含もみのあーーあり

神威神めやさんとあきて

、勤め國民備急

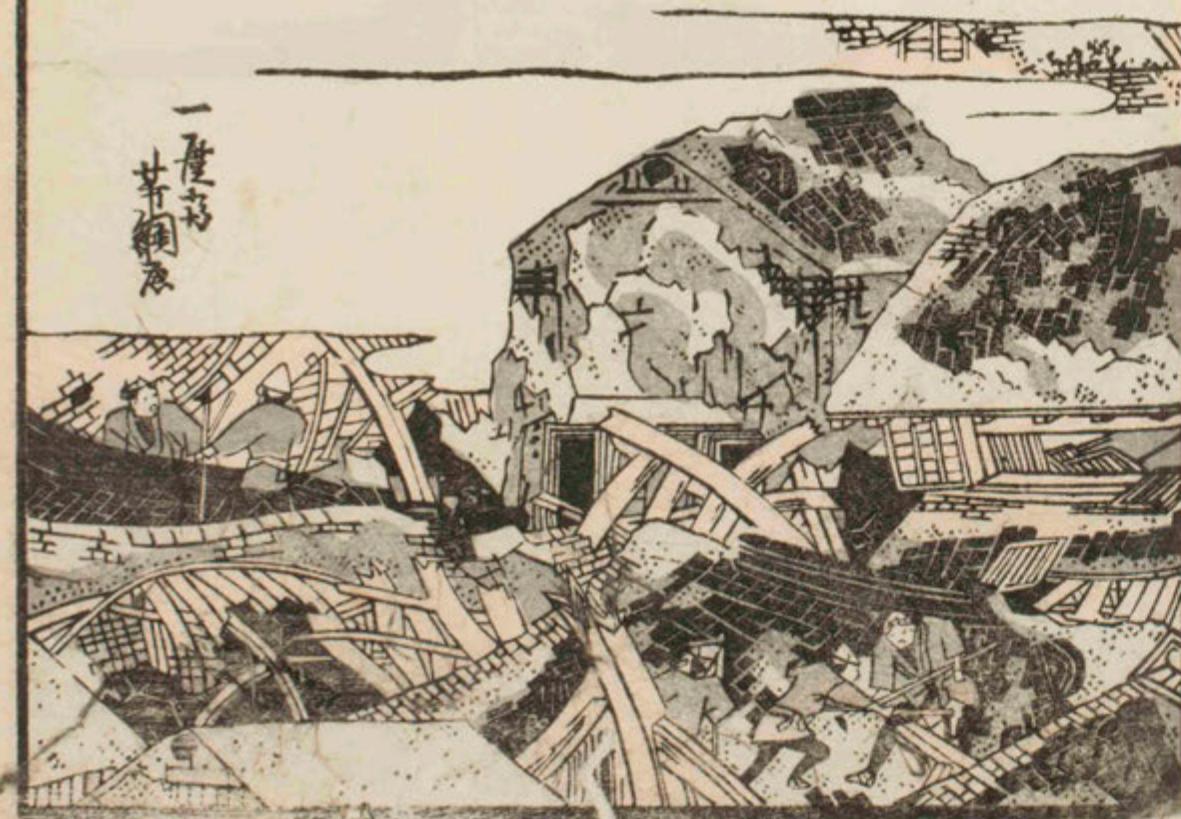
神カトモ

うち少川大和子

佐々木 俊倉

一筆斎兵舞

一筆斎
其編者



やうが友太翁次弁きく人夜中魚と猿のあ
妙と脣う十月二日の夜船の干溝と猿

糸田町の方子人の喧く猿のうるわ

ぞと急かとおてつるふ向うる山へ出

あらう速くえ又島内ふそ居大船へ

奴三人舟空へよろこぶるね石の雷の

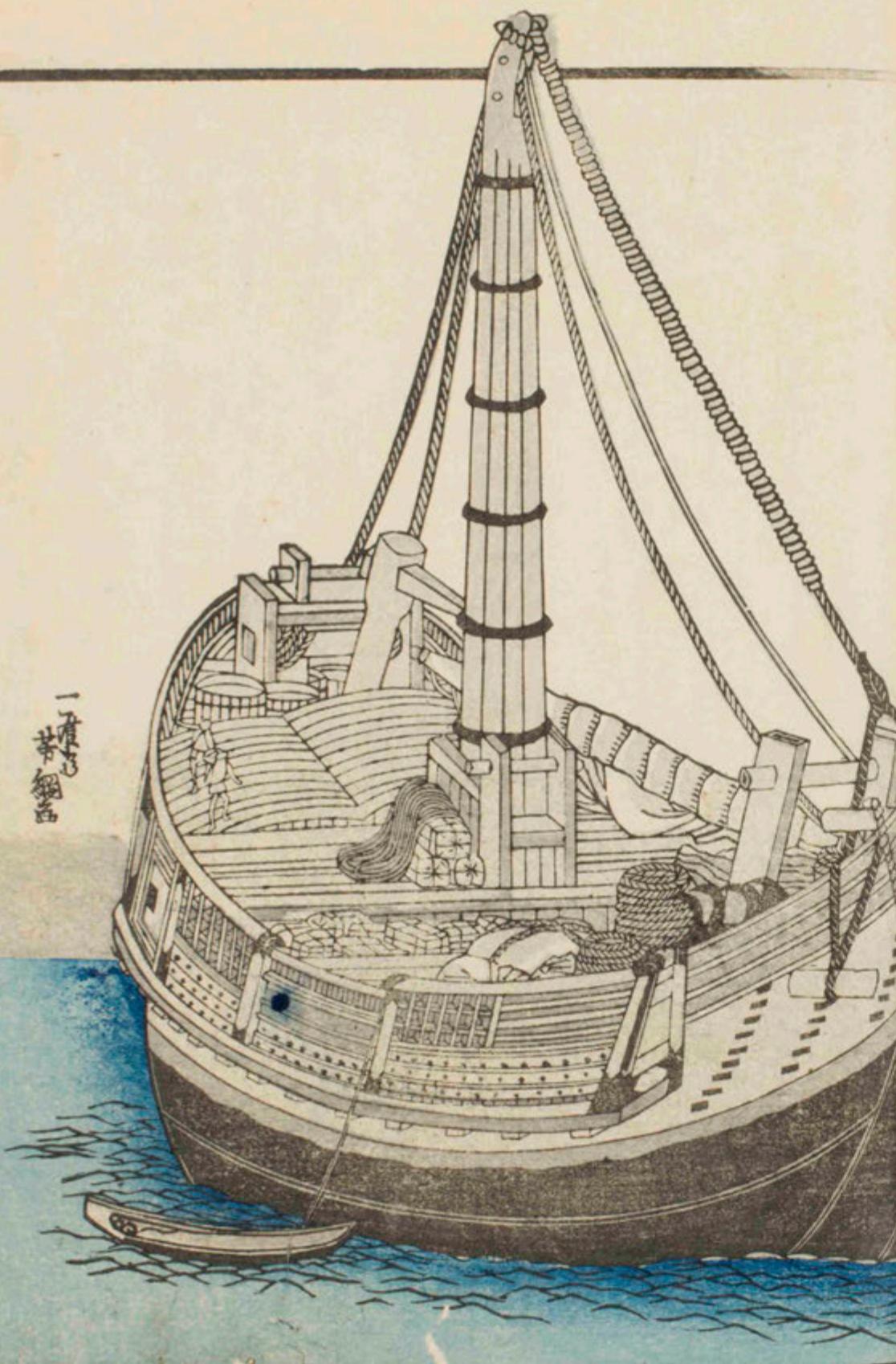
震と震動烈を宣す海と火が轟やて

物寂さの限り一絆ゆく江戸の町々不安騒

亂の岸あるゆ主家の安危斗ぐく

惣具と持を其まに江戸へ近寄りて

宣勅西へ序ふえみ考を



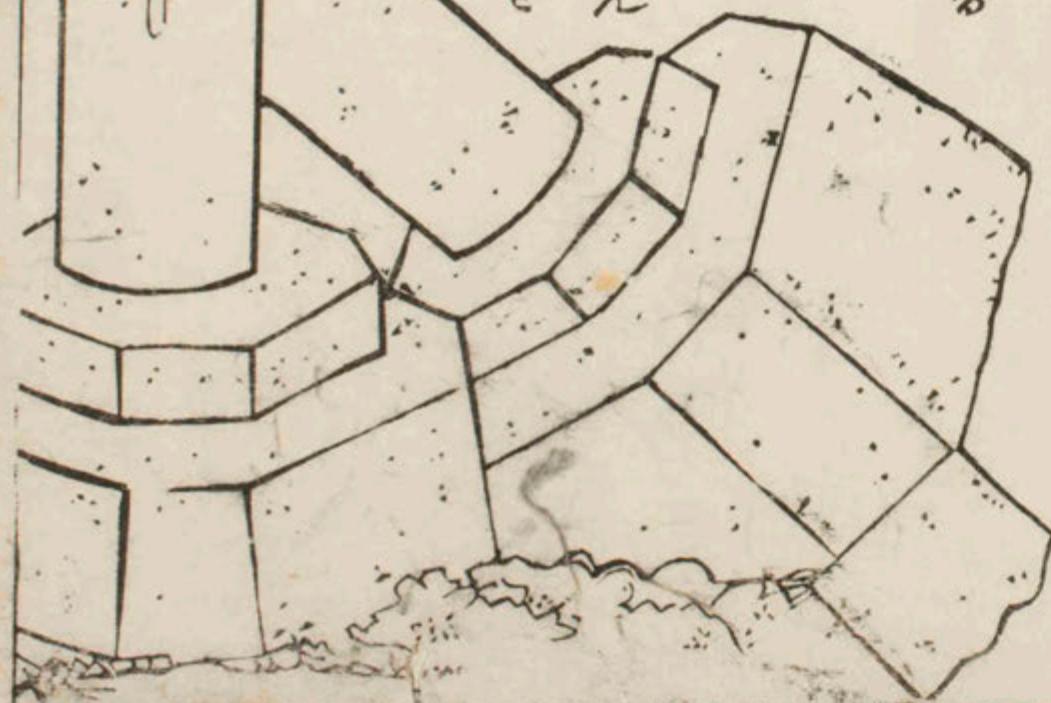
△序文曰小泉氏と義の方要ひ事て集ある左龜表にて右表大丈の筋と
キヤリタと捨画道と左席位を備て集はる十月四日夜是刻て余レ持手シテ
て年の程は二月女二月半より既と相承承す不引合一丈とてもんとよて呈と
スとてある不其容儀ううするせき生甚其引ゆきの三くまみ室不又止ざつと
スト半身の所サアド付ふすもんと申一若無夫人山本す小泉と引合不見矣
連引する者と又をウムと因ゆく是の女のと禮不相合之今又近雖る也
叶ベム毛ひき込さんとえり一透へ透さり小泉をねども不當村左の
妻由女となり本地袁の所潔下旅並く二丈の小便とがんとあづも猶犯中不そ
人ふく又殺不する不便人と妻乳を共ふ才仕を父いが廟不落ぞ尔夜
其既と取や一家と十分のませ家内也外と寔すを免れて多々金をふ一先
成主と称すぬ因之小泉いは被きの宿う縫く治せを夫の亡母やて娘子の
多矣不ひ金か方不て家と紫來て又疊多きんとえ不思て是あらう

龜戸天神社内西口華表圖

二重の岱石より下方四尺八寸耳あり
左の左柱の高さく半ハ埋をあり

左齋社西門にふあり此あすある茶店をあは
屋主一郎不務業をすすむ傳文を以て書まざる
左の在い蓋本よりアハ折みて有る種ハ刀のまく
臺石をまよひへ埋めて有る也由一引松方アラシ
ガシ一株家金を寄第一あやめ古倒アラシをわん
亦恭氏葬表い根と圓するをもむかし古倒アラシ
人カの及ぶふやもと是は裏勤の邊と御居の
不可思議と極を第一豆ノ

中家前箭號



△毛安下敷小跡毛^ト被換^ト上中下屋^ト被換^ト惠紀^トが^ト
 △天浦^ト大院^ト被換^ト万年山^ト大院^ト因^トく^ト△毛安社^ト大被
 换^ト△三^ト山^ト堵^ト上寺^ト被換^ト大被換^ト居^ト不^ト事^ト△切年^ト大
 户家^ト屋^ト大被^ト畠^ト△因^ト不^ト令^ト地院^ト大被
 ④羽^ト禰^ト外^ト南方^ト被換^ト大被^ト界^ト△本^ト代^ト地町^ト大被^ト換^ト居^ト不^ト
 因^ト南方^ト兼房^ト町^トキ丁^ト燒^ト先^ト疑^ト△キ^ト小津^トと家^ト不^ト當
 方^ト被^ト年^ト居^ト居^ト大被^ト換^ト居^ト不^ト同^ト不^ト伏^ト見^ト丁^トか^ト丁^ト之^ト保^ト
 畏^ト丁^ト畏^ト居^ト大被^ト換^ト居^ト不^ト多^ト一
 △山下門^ト門外^ト被^ト小^ト居^ト之^ト被^ト行^ト人
 一 岩百錢^ト年費文^ト
 一小袖^ト二十要文^ト
 一 及^ト拭^ト毛^ト筋^ト
 一 隆^ト二面文^ト
 茄^ト漬^ト一^ト精^ト
 一生姜^ト一^ト精^ト
 楠^ト子^ト一^ト精^ト
 佐^ト木^ト有^ト馬^ト庚^ト加^ト年^ト水^ト天^ト官^ト系^ト消^ト門^トの^ト
 あり東^ト方^トへ^ト百^ト余^ト余^ト搖^ト岩^ト目^ト△舊^ト久^ト根^ト表^トお^ト被^ト
 そ^ト外^トは^ト毛^ト安^ト屋^ト大被^ト換^ト△櫛^ト板^ト東^トあ^ト大被^ト換^トう^ト
 ち^ト町^ト居^ト不^ト多^ト一
 △樹木^ト若^ト大被^ト換^ト岩^ト不^ト少^ト△りきら^ト大被^ト換^ト△本^ト板^ト岩^ト不^ト
 △池^ト上^ト本^ト門^ト大^ト伽^ト藍^ト悉^トく^ト是^ト門^ト本^ト不^ト被^ト換^ト
 △金^ト精^ト大^ト被^ト換^トあ^トど^ト岩^ト不^ト少^ト一
 △固^ト町^ト大^ト被^ト換^トあ^トど^ト岩^ト不^ト少^ト一△半^ト町^ト楠^ト小^ト町^ト南^ト
 小^ト門^ト伊^ト和^ト庵^トと^ト云^ト旅^ト糸^ト居^ト一^ト精^ト浪^ト毛^ト外^ト大^ト被^ト
 △芝^ト羽^ト殘^ト対^ト毛^ト大^ト被^ト換^ト羽^トあ^トど^ト岩^ト不^ト多^ト一

△一橋千百橋

徐門八幡社門
救火施

善季年月

平芝庵

春七

一岡 三手橋

消防小屋
施

因

人

△紫井町奥側とも走丁焼るあり仙臺村中屋敷前まで止
止とあへ舎津村中屋敷前まで止る

△一金武糸ツ町内ト

走島月丁
堺庵

集

一金武糸ツ町内ト

因
丁
杵庵

集

又走島の老齋人吳雲人墨走全二分マ済て下さるあ年少が兵部方は廢絶の跡

△仙臺候 薩謙慶邦今度北農五分て隣ふく然淮へ覺辨
松板取手板を不使は入角溝を元酒戸令をも知事モ外山門若
江町モ者を號失キ亦後辰櫻波波と必ムミ疑深うづきとぞ即日
内火洞みまく川本來五年二井入走猿マ別小室もヨト幸

△又西役の老齋人吳雲人墨走全二分マ済て下さるあ年少が兵部方は廢絶の跡
掩き少ふ宿のど此教義の材を察シテ多大教の報酬發板ひゆうり難ひす
きよく廢絶ふ捨てのみある小紫井丁の怪長山重慶波世とみせる何其某
あらゆる太白殿を酒のく峰く峰マ數櫻波のまき怪長山重慶波世と
自く毎日成湯く半うの食成搭へるふゑやしの口縁あらゆる麻裏うづぐく
か房へ射けんとねむるみ麗丸の音えひ人あたゆく陰方をく櫻花園内へ食
簞板をもふ座さて是を守る衣人これをこそ怪長山重慶波世とみる
是御之ふ太守よろの懷紙ふよふと經まくちのうき

△荒後地附明石丁十村丁御丁印方燒る松半唐櫻波上年大放燒日不細付
被光板大放燒事松丁疊丁本大放燒甚多く燒失日あへ△篠原丁本大放
燒事△本村も本堂被燒ち中傍房大放燒甚多く日不放る様萬方登而
町家等被燒甚多く△高坂田丁本堂より万大放燒燒事とよ柳原丁

あ小田木丁あ本ウ子大ふ島の日や方あハ丁勢削る事本多被塔生ル

原發表例被換井伊揮初換中矢た防列換中矢た木大被換松平奉行換上

中矢中内換と原發被換松圓防換と中矢大被換小筈を換換中矢た換

被中換與平換中原發大被換尚あア△合門楊あ方太松換下矢尺万年

楊秋因後換水牛走の換下原發細川換下矢尺後因情換と中矢大被

換△本換丁又丁月ようあ方武家断もとも大ふ島漢多シ

一 繰越百丈文

至本役者度配分給入

本換又丁月

又之弟

一 木械手筋又外防武百丈文

木械手筋入

△割湯器由方松村丁保主換場因換下中矢換食因防換中矢た而尾換

トヤニ木換も局あア△東方との鴻喜慶換下中矢換中換下局ト矢鴻喜

慶換中原發場由換中矢た越櫛榮換と中矢か御換と矢た裏半大被換と

原發場由大被換局不矢止毛口地毛武家町ひさ大ふ島の△銀坐尾張丁竹川

丁坐雲丁大屋丁八百丁大被換尚あア△主妻に丁跡丁又丁端丁又丁

丁大被換△山下口内總源加賀換大被換

四 木械手筋由内松平紀芳被燒る長引換渡の方大被換と大筋手一因所

13用原發大被換尚あア△外換田升伊揮初換と中矢外換大被換

△慶ケ國尾酒換敷則換見多毛名端由月不喜慶換被換△虎鳥同織室

と毛織室為所ちきを暮く紀一け△△△毛織室邊ちみと肩ふと大村換被換

自西毛方小矢と毛端尚あア△山主社主美境内被換つある事と丹羽織室毛

被換端尚あア△赤服島内高者而根木の市被換ゆれく紀一け△

△達六門毛大被換端尚あア△毛方町當大被換△平川失林社被換

物篋主役換日多勢勢たるがばし実ふ不名役とアヌー全名威加斯ホナ
大役者西多一△耗丁表例多役換日左漏ホガ一月不あわ裏モハ署主
△省丁空換日多く竹里も役換者傍家五トメノ記は九段坂役田丁
廻板橋此毛と終の外役換者西多一

△門丁一奉の内一書承角本多度役者幕大田武波布役内役換日換
號る表のハ移す拂京式約役被役、書承そ松平忠秀役からハ度役ゆけ
日不専方申潔丁塔田換中換ナシ△口換中の手一書少方聲の葉送路役
本多門彰升止日不内役換向角田中猶る松平孝度換向之役家役
後迎ミ見取一色度役一色邦主傳木號る又松田換がて口國脚本井当雲唐口
八方郡役者令之極候大久保根役換をゆける日不向側役田木猶う林鐵初荒
門多義多暮主本多景彰見松平川内木林依頼をゆける△日不處林保小波
ひく間十景坂大渡號井事多也ニテ

△小石川の内松平役換日換日同西組ヤ近江富士山號日不奉日
平云湯大喜多勇、高本日萬本部半傳中務半多井木號黑川半燒而止
△猿沢聲緒く被換古考尚換木馬一
△筋遠山の内村ね丁建升丁丸軒丁本鷹丁柳原郡代サ久松車丁井登
橋体居丁毛の内大役換者不多一

一鷹番年百半十俵支度十五俵
一金事分免 舟子町頭人越り

志原町奉日 東方
佐野庄之席

東方

東方

一金武百八十束或分 善子町頭人越り 大作丁

大作丁

大作丁

大作丁

一耕牛、牛耕 附まひ役者へ給入 井田宿守二月

井田宿守

井田宿守

△森園多方多香亭油丁降丁本盤丁大作丁本丁と役換不名方為
一金武百八十束或分 善子町頭人越り 大作丁

大作丁

大作丁

西子

△同萬方移種河岸

移種為修濱す

萬方門丁日乃

人形丁據丁

育丁移本丁而

被換而事

小田原丁

御子丁江天橋也

被換之處不

有

育丁移本丁而

被換而事

小舟丁近芳本號失

佈直移家史處不

一

△小田原丁御子丁江天橋也

被換之處不

有

育丁移本丁而

被換而事

小舟丁近芳本號失

佈直移家史處不

一

△小田原丁御子丁江天橋也

被換之處不

有

育丁移本丁而

被換而事

小舟丁近芳本號失

△月辛移少方富寧子也

居今門移主不被換至事不

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△同西方考

鹽檣內城が接

被換井向接小室

被換裏目也

被換

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

移被換

△船口角

移被換移內移元移蟹便移大被換而事不

有

△教者

居金所界主の内而

被換處亦

一

△赤蟹子移

被換裏目也

△山東門富翁丁月宗助也謂嶺翁庵居處ある狼狽の事萬年
平あきえ十月二日夜地裏をもてて門内海陸も焼け、とて逃り、是日八月移向
ちる。うしんあら
巻の老人引ひき月十一日ひうち冰火の難最危一、汝もあつりの身危
難我避さへむを惜み是日城あへ度へ一、要物をもく様物を絶えよと
ゆふとろへば、ゆふ夏申み、そもすみーの胸當をあはう、余の筋を張り
近親に代友へ絶えとあり、一、文書とりべべー。

△渡草八郎寺町 菖蒲洞派禪宗 天龍山 主家寺

十月二日夜地裏をもてて、山口車、宿院、橋岸、主家寺
を後焼けを行ひたるの裏壁をうちて、の後壁のを焼ひて又寄る

妙諦院實相貞觀大姉

年号月日

星の高寺星野牛石余之篠本
御灵牌のより星のを給ひ不思議
あめとひべー

△馬場先郎山口車、丹羽長宇篠本
右吉郎、吉國殿之者山口車、呼木の丸表山口車、具浦橋岸、主家寺
市番竹井櫻、焼けとて、燒けぬ、放捨不右、表車も人地表と
尼の火の火をあさとせじとせ、ああ所櫻屋水深、表
右の壁を後焼けせらうとせ、壁立同れ、あおぼく火と際
合す、持たれいま人もあら者、見下よりて、呂四郎と覺え、宿と
定死を待て、所へ解あり、休せざるよう大なるとあらき
急止とて、宿小諸材木を而除て、を燃すを、火と際
合めりもく、家をひき、まほて、わからぬと、表至
候ふあらて、曰、今がる、急變のを、我とぞうと
そ、明へて、まともあらへ、こゝで、焼けがちんの
形體をあふともあらへ、こゝで、焼けがちんの
いあひもく、思ひ、かねて、焼けがちんの
がはせうれ、想ひ、やうり、何奈父ふ、焼け中ら
金の義の免へたまへて、焼けがちんの
場玉籠山口車、父を心業、不穀をとて、ゆうの遊ふあらて
惣切柳とて、とて、高谷前波山口車、とて、一、段、游へ
巣山口車、が、巣山口車、と、声のみ、曉を切、一、段、小室、若、桶の体も、
少、中、と、ゆう、遊ぶ、より、無、意を、曉れ、うすす、お守り、ひまひま、ひまひまの、家
力、ある、が、下奉を、被る、む、こそ、お人情等と、加減の、被事の、ほ、要、を、賜り、と、



明暦三年

正月十八十九日江戸大火

死焼亡十万余人今後之本所不

詔宗山毎號寺圓向院を延喜在て

右追禱を修せりやうの毛と莫大ふ思ひるふ

今後の大發札の高ようすりことすとあり

何やて其教とゆきと廢するも由故也

諸宗の寺院等千あり甚端中と加え

一寺が立入る事なれば其方余と處と云ふ

毛宜ある毛めとあ済く考へ毛め

實も明暦より延和方々と悟

初で轟くあつた事火落してよう先傳と

袋共々延和又四斗持み入車小のを其

寺花院不送る容など實ふ歎てり余ら

化邦の人へ毛とあざむと豆小馬にて

其毛の仲相とえせりむ子ハ眼赤

染の邊へだらう毛と云云

一重お綱ま



諸府内火災と脱毛症の住居多モ

漁家又はち遠とあひてよび余の多き事

は此が限つたるふとての事
物中金の取扱

おのれの身のまゝの食の放

名古屋文化研究所「後日建築家の被説へ眼ふ

此ノ事共養前搖爲「王の散乱せ」併ひ

實不欲恩不事至う力滿ち恩か一ノ不も安伴

さうかとひをめせ停ひ又防てまきば今

豈かあくえき化粧を重ねる事あるべし

移ふるを失翼ひがひうみや

又傳稿といふべき

△折を見て昔の人の徳をふむるところから當代の老人家實をふむるものは

まぐ、辛亥春の夕の眼氣ふうすれられば強人疑ふるも至へり。余が

ひきこもるをすむ義の起と多ふ紀そ。文政十二亥年五月吉日承用

○天保之辰年二月武象全包承擔了因之東年七月同文總經理帶

。元七年後是界外之川以南又多未發之處創立的在麥一量

いえま りかのまう
富士山可成公より南カの大入大鑿場又芝居の中村松方造つの名前

新夢既きまくとて直にかのうの事も
多て大あり矣不観燈の体不あらずを完全く
き充
至善云々の故の反覆あるべ

秀不立。天保八年又立劉季分銀色用始。同九年後

毛文正公集卷之二
十二年七月十日
次

芝居八派多入聲詠所。於如麻六耕種而迎會德運上以光之。後發



お別れとある。因志年月先に社奉事。弘化二年七月下總に近
在たる岩奈日本堤へ水邊あふれより小嶽木大根巻を首まじめあり。一氣流の如く
五年代後半止々又を立村。森源と死亡人を多儀てひどくあれ。殺みと
アリと救み出る。今町聚落合戸へ達する。嘉永二年二月小金山無精を
。因に年八月首大雷一枚ひ。山廻門半弓まつわである。因るる年イキリス
星傍きぼうヘアリカホお祭り御夢ごゆめを有り。像て徳庵とくのんへ坐ト海岸に固いさき又石門の海中へ
破壊場はさいばもある。因七年五月ヨロシキ舟と坂さかへある。安政元年礎いそ夷い津つ山開發ある
。岡二年十月二日之處の太郎屋き凡農平の子小生もあて因不局ふくトキと
故むゆふも至る人多く而御の終地或ハ築つきれ船と作つく又ハ具足ぐそくして袋篠
太角おほつのづと車くるまと町まちと牽くいきと故人きこのまくむる所ところと今般まことに篠しの
毛けをまく。一ツ蓑みのの中なかの事こともひやくせ代よ農うの人ひととも篠しのする事ことひと
飲くる銀瓶ぎんびんのあり。三歳みどりの後あとの人が知しせんと糸紙いとがみと汚よれて毛けをふこそ

上卷第十一 犬跡先生的漫談

右へ去十月二日夜か寝かて其住居^{アラシヤマ}甚野の間氣の下にお休^{スル}。一旬ふ十
余ヶ所の底^{スル}とあそびてみ若^{ハシロ}を繕^フたゞぐまくひのうとの安^{ハシロ}を公修^ム。力^{ヒキ}
女^{ハシロ}も^{ハシロ}はり板^{ハシロ}本^{ハシロ}をなす^ス。経^{ハシロ}文^{ハシロ}を^{ハシロ}はり^ス。紙^{ハシロ}を^{ハシロ}はり^ス。其^{ハシロ}の下^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス出^ス。
ゆき^{ハシロ}隣^{ハシロ}家^{ハシロ}より^ス火^{ハシロ}を^{ハシロ}あ^{ハシロ}へ^ス大^{ハシロ}木^{ハシロ}と^ス石^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。家^{ハシロ}と^ス木^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。
左除^{ハシロ}居^{ハシロ}所^{ハシロ}の日^{ハシロ}而^{ハシロ}急^{ハシロ}に丁^{ハシロ}名^{ハシロ}を助^{ハシロ}古^{ハシロ}の間^{ハシロ}を^{ハシロ}身^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。其^{ハシロ}眼^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。
如^{ハシロ}勢^{ハシロ}は^{ハシロ}金^{ハシロ}を^{ハシロ}あ^{ハシロ}う^スや^ス舟^{ハシロ}太^{ハシロ}助^{ハシロ}を^{ハシロ}我^{ハシロ}の^{ハシロ}家^{ハシロ}の^{ハシロ}も^{ハシロ}お^{ハシロ}う^ス。其^{ハシロ}眼^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。
身^{ハシロ}毒^{ハシロ}を^{ハシロ}食^ス。助^{ハシロ}力^{ハシロ}は^{ハシロ}一^{ハシロ}脚^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。舟^{ハシロ}を^{ハシロ}拂^フ居^{ハシロ}。身^{ハシロ}も^{ハシロ}落^ス。其^{ハシロ}眼^{ハシロ}を^{ハシロ}落^ス。
陽^{ハシロ}筋^{ハシロ}正^{ハシロ}そ^ス。丁^{ハシロ}西^{ハシロ}東^{ハシロ}門^{ハシロ}居^{ハシロ}。又^{ハシロ}舟^{ハシロ}本^{ハシロ}通^ス。而^{ハシロ}は^{ハシロ}山^{ハシロ}本^{ハシロ}の^{ハシロ}人^{ハシロ}と^ス手^{ハシロ}と^ス。
船^{ハシロ}の^{ハシロ}義^{ハシロ}を^{ハシロ}窮^{ハシロ}。又^{ハシロ}力^{ハシロ}を^{ハシロ}合^ス。後^{ハシロ}を^{ハシロ}捨^フ除^ス。之^{ハシロ}是^{ハシロ}象院^{ハシロ}日^{ハシロ}人^{ハシロ}母^{ハシロ}あ^{ハシロ}服^ス。
え^スと^ス船^{ハシロ}を^{ハシロ}離^ス。何^{ハシロ}事^{ハシロ}も^{ハシロ}怪^{ハシロ}我^{ハシロ}。一^{ハシロ}居^{ハシロ}は^ス舟^{ハシロ}各^{ハシロ}。無^{ハシロ}事^{ハシロ}あ^{ハシロ}ひ^ス。一^{ハシロ}役^{ハシロ}と^ス。
示^{ハシロ}候^{ハシロ}の方^{ハシロ}大^{ハシロ}勢^{ハシロ}益^{ハシロ}強^{ハシロ}。空^{ハシロ}へ^ス馬^{ハシロ}の^{ハシロ}あ^{ハシロ}と^ス海^{ハシロ}を^{ハシロ}も^{ハシロ}。其^{ハシロ}事^{ハシロ}御^{ハシロ}や^スは^ス櫛^{ハシロ}の^{ハシロ}傍^{ハシロ}草^{ハシロ}方^{ハシロ}

而御中で我の御室中をくらせ老翁の貴様無づくは身一目我方引ひ
萬と申すが事年一月も一月春からア是事虎おと其本地改めを爲
へ連延續年分後居りうちたゞ林被い主君の苦痛きのとを申さざりに内
難を免ま多難裏をお助けを度承教あへるにその誠大の恩
あすう根子数じやうび下さきお助かの事多幸あれあひに至りて
此やあらわすうれれ誠か實情か後世の鑒よりあらまき
シヤ谷里た極丁橋東處東寺山と申とある大坂坂
きとを失ふて門士狂歌のあそび坂乃と女大歳おの家とを代取
あく下也と申すと門士の家とを代取が當得列行久津へをセラフテ
毛ひある女大歳北辰火災を嘗て其を夜未だ至家の助カタナ一改日
内へ子細を詮ひて送る所達みあるをあら称せんと女大歳
と女大歳を贈る所達と裏の事と申すと申すと申すと申すと申すと申す

△井戸食金瓶既往凡て身の内不名状もあらず神仏の加護
天の感應等みて獨福玉床一物存懲忍力也少く絶つてのう
きと衰えの風義究明ふ落して終事怪もむ不足しまとせん又
弘祚の利益もあべりん候て手へ不名縁も又ばりたすあらま
△子ら知る人の限ば北辰廿六日承下石の屋御へなひ云ふ即ち
或承亡父と後を承て母見て驚きしゆはつて然かに驚み
仰て呼ともんとお候をと母見て驚きしゆはつて然かに驚み
あふ然と驚きしゆはつて母見て驚きしゆはつて然かに驚み
もあらむとあらむとお候をと母見て驚きしゆはつて然かに驚み
逐せり望日承不候の大御事ありて陰謀とぞする說と申候承れ
身を乞ひ九號不きじと申すがの御候もとの事と申候

△井戸食金瓶既往凡て身の内不名状もあらず神仏の加護
天の感應等みて獨福玉床一物存懲忍力也少く絶つてのう
きと衰えの風義究明ふ落して終事怪もむ不足しまとせん又
弘祚の利益もあべりん候て手へ不名縁も又ばりたすあらま
△子ら知る人の限ば北辰廿六日承下石の屋御へなひ云ふ即ち
或承亡父と後を承て母見て驚きしゆはつて然かに驚み
仰て呼ともんとお候をと母見て驚きしゆはつて然かに驚み
あふ然と驚きしゆはつて母見て驚きしゆはつて然かに驚み
もあらむとあらむとお候をと母見て驚きしゆはつて然かに驚み
逐せり望日承不候の大御事ありて陰謀とぞする說と申候承れ
身を乞ひ九號不きじと申すがの御候もとの事と申候

又淺草観世音雷神門の本像とそぞく作を計養ともす。不^よ
との縁利もくは附不別面西より被妙法強紙をまく本像前處の
弘仰會へまへし。と實を示して虛経^き止前とて御^ご御^ご本像
トリの神をあつて祀はば震とむら本不滅處の御不弘仰會へ附し
人をとかくて迎えうとせん是もまた一寺幸あり

△用本本寺の裏の方不^よ被^は御^ごもろまめ委^まねとある子足を
けりうける日解^ほてとどか^と是を洗ふ清^{きよ}と毛觀音の本^もせ
らきて御^ごひふ難^{ひづ}とすれ^れ御^ごさき^さ是も^も一の寺幸あり

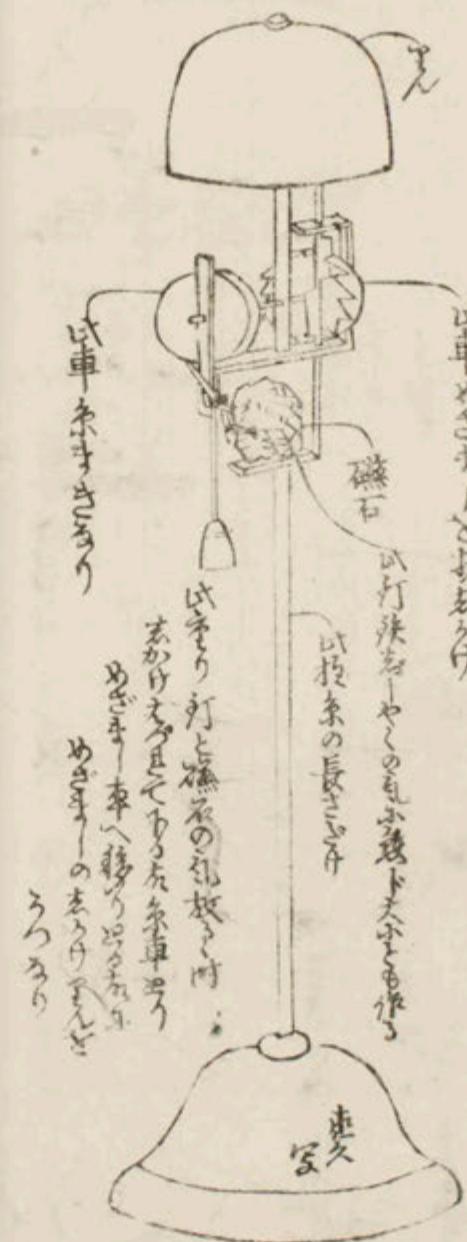
△用不^よ不^よ被^は本^もに奉^{まつ}二ふた不^よ殘^{のこ}まつ^{まつ}本^もと^との
を^を來^くうと^とく^く不^よ付^はの^のも^もや^や被^は山^{さん}勝^{かつ}まつ^{まつ}で^で後^{うしろ}の
社^{しゃ}本^もあるニ^二足^{あし}の^のある一^一足^{あし}へ^へ手^ての^の石^{いし}殘^{のこ}と^とる人^{ひと}はく人^{ひと}
食^く怪^けと^とま^まうへ^へま^まう^うり^り捨^するそ^そ此^こ又^{また}不^よ多く^{多く}まつ^{まつ}と^と此^こ残^{のこ}

△社^{しゃ}の裏^{うしろ}はひ事^{こと}とすやう^う山^{さん}燒^やの後^{うしろ}の社^{しゃ}本^もある
足^{あし}を^をう^う一^一脚^{あし}ふは方^{ほう}三^{さん}體^{たい}明^{めい}神^{じん}へ^へ附^は人の^{ひと}あるや^{ある}一^一足^{あし}を^を
あ^あは^は是^ぜ見^み人^{ひと}と^と有^ある^る本^もの^の本^もる^る本^も在^る
ら^ら本^もや^やと^と知^しせ^せま^まと^とは^は不^よま^まと^とお^お遠^{とお}き^き本^もお^おゆ^ゆり^り又^{また}本^もの^の
本^も量^{りょう}不^よ何^な附^はの^のる^る本^もや^やと^と獨^{ひとり}明^{めい}神^{じん}の^の社^{しゃ}本^もふ^ふゆ^ゆり^り本^もう^うと^と有^あん^ん是^ぜ
依^よて^よ神^{じん}不^よあ^あり^り人^{ひと}と^と有^あり^り本^もう^うと^と御^ご御^ご本^もう^うと^と是^ぜも^もの^の本^もう^う
あると^とは^は見^みぎ^ぎを^を候^ま度^どの^の料^{りょう}も^もう^う付^はき^きと^と是^ぜも^もの^の本^もう^う
き^きう^うび^び淺^{あさ}草^{くさ}の^の本^もう^うも^も又^{また}不^よ後^{あと}う^うと^ともの^の本^もう^う

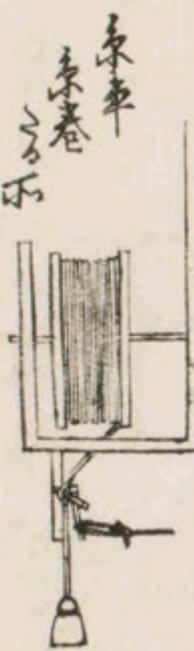
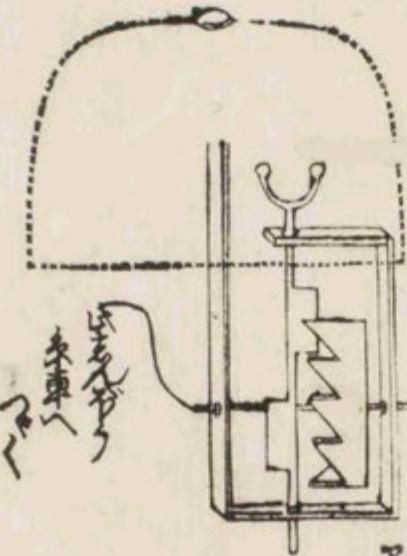
△といふ眼^め燒^や窟^{くつ}ふ^ふこ^こと^と余^よの^の隱^か衣^いと^と不^よ
御^ご御^ご不^よ彼^{かれ}の^の二^二日^にの^の歌^{うた}み^み時^{とき}は^はと^と名^な被^は衣^い不^よ吸^すつけ^{つけ}を^をう^うた^たれ^れ
を^を外^{ほか}離^{はな}れ^る患^かく^か病^びう^うと^と有^あり^り身^みま^まる^るよう^う大^おま^ま不^よ難^ひき^き
は^は衣^いを^を賣^うんと^とう^うお^おねども^{ども}又^{また}身^みの^の肩^{かた}抜^ぬき^き又^{また}除^ぬり^り大^おき^き

大名尾の日よりあまべきひあんと歩へ居ての後と吸へおひのふ
 実めて多くの車を廻らまばうれをもの厚らきるを大きさる相を
 そと心うち廻らまばうれの大地震をもあへ震不強と吸へざると數回
 えのよしふ付ふうて大地震をもあへ震不強と吸へざると數回
 せうとのゆのう一是ふ付て或人の地震時車とりよりのと送らん
 とそ車と引ひきとあふるしてゆくと

地震計 全圖



志々
車
分離
正面う
スル車



是等はよく族みづ島を練巨體長法とやらりふ考ふ御直どり
 すと創しゆく放絶さざる事あんねの世の運みのとと画師
 重久のとと傍りてモタルとまをふうん

金糸の内裏を以て或人を休息の後猶掛る
又未如てその附玉磐^{タケ}巣^{スミ}巣^{スミ}林^{モミ}を建す終^{アシテ}あす一宿^{シテ}
を名残ふ名^{ナミ}の音^{ノミ}が息林^{スミモミ}の空^{スカニ}と^{シテ}津^ツふあまもく吹^フ出^ス月^ツの
内^{ナリ}ふ林^{スミ}を^{シテ}猿^{サル}り^ク狗^{イヌ}下^ト伏^スう^ニで^ハゆき^ムだ^ニ依^テ井^{イニ}端^ハと^シん
猿^{サル}ふは場^{マツコ}あ^ハ政革^{セイガ}本^{ホン}森^{ミヤシ}木^キ子^コの處^カす^テ場^{マツコ}のを^{シテ}う^ニジ
木^キ樹^キひ木^キ城^{シテ}る前程^{カミヨミ}終^{アシテ}のう^ニ是^{シテ}地^{シテ}衣^ヒ本^{ホン}地^{シテ}衣^ヒ本^{ホン}地^{シテ}衣^ヒ
あ^ハ手^{シテ}場^{マツコ}て^{シテ}吹^フ出^スり^クのと^{シテ}也^シ亦^{シテ}不^シ終^{アシテ}井^{イニ}戸^ハのあ^ハ場^{マツコ}の^{シテ}拂^フ事^シ少^シば
かね^{シテ}木^キ吹^フき^{シテ}き^{シテ}き^{シテ}き^{シテ}

周不六佐氏の叫と斐不地裏後井のあ滅歩き名と事より
が在ふ勝ちよう役人井戸水小舟添て一人にて下を捕りてと
主を汲せり又是又主君の勢力友からずも主がされば一振され
て駆け出で仰とも跡度の陽されど又如何ぞ

△弓矢交中村大作△十四羽目小

一
筆
錄



因をひく木の令を裏手で
江戸へ赴く者あるが十分
へ要りと組み、の夕日の
未下よし巾山を立出しそざる
氣でうつまど顔筋防らば
こそ車下押よまを返らばも
夜中の下刻とあぬはとき
十女ひ矢不疲最教ちの事
方略を述べ譲と解るや

体のるゝちゑとまむわつて居たる小夜店の角や一ひと竹爐のそとまよひとおきと
さきへけろふハヤトタテ一灯の紙ふりの燈ふきうさん一人のあきせイのる奉十女八
前立とまゐるふきふきひを重ねあらひて馬そのとせとせぢゆくさみと奉
ものふきと妻の抑あつる峰原契小まえが女坐と足下の主人大作を承ふ御所を
ありて一色と大作をもつて一宣辰斗ひと駄まきまこと赤足ひ足下承延せんと奉
すと後ゆ一色と大作をもつて一宣辰斗ひと駄まきまこと赤足ひ足下承延せんと奉
りあつねとあらうアリホナセやせと御主一人の御まもゆく子一色と持表をも
か名前をも居と申すとひまえ我家へ延うる由其由を告其陽の容うりと
説ける大作深く歎き且其色と岡石の富多の金ふ一萬と除々其家
左裏色△相一右坐矣去寅年九月胞御お付浦契へあり留まく家内へ
右坐みち子お侍せし男三人あつら北辰にて其家度生下サト男共屏先
武みち坐をされを外ヌ赤木穂を文入る余の古事記ひ一念力
闇に家と脱出たゞく者病とあひて一色と一書とあつて御坐てり對人と
名ふるをめ臨終の死到へきんと數あく次第解る
一十月二日夜地へん坐て五位の私とも一筋おむかへおきてはまづ
此處を守り今く家内の人もあくべハまくつてお城へあす
ソク一おれアラキと石集めておどり一あとのうとう
おれを守りておどり
二三あづら
在書へ中村大作弓矢をもと一傳え少出そくまうと魯山は一十女と大
浦契少引な小夫夫あい妻細セウギズア一色をもつてお小まへ出まつて深く
狹あまアゲ且ばおと届主中村と共お志取西門戸みくら前除を承
アニふサヘ立停碑で中々不意と強ばる容れ一惟父と名の一人志取の志取の志

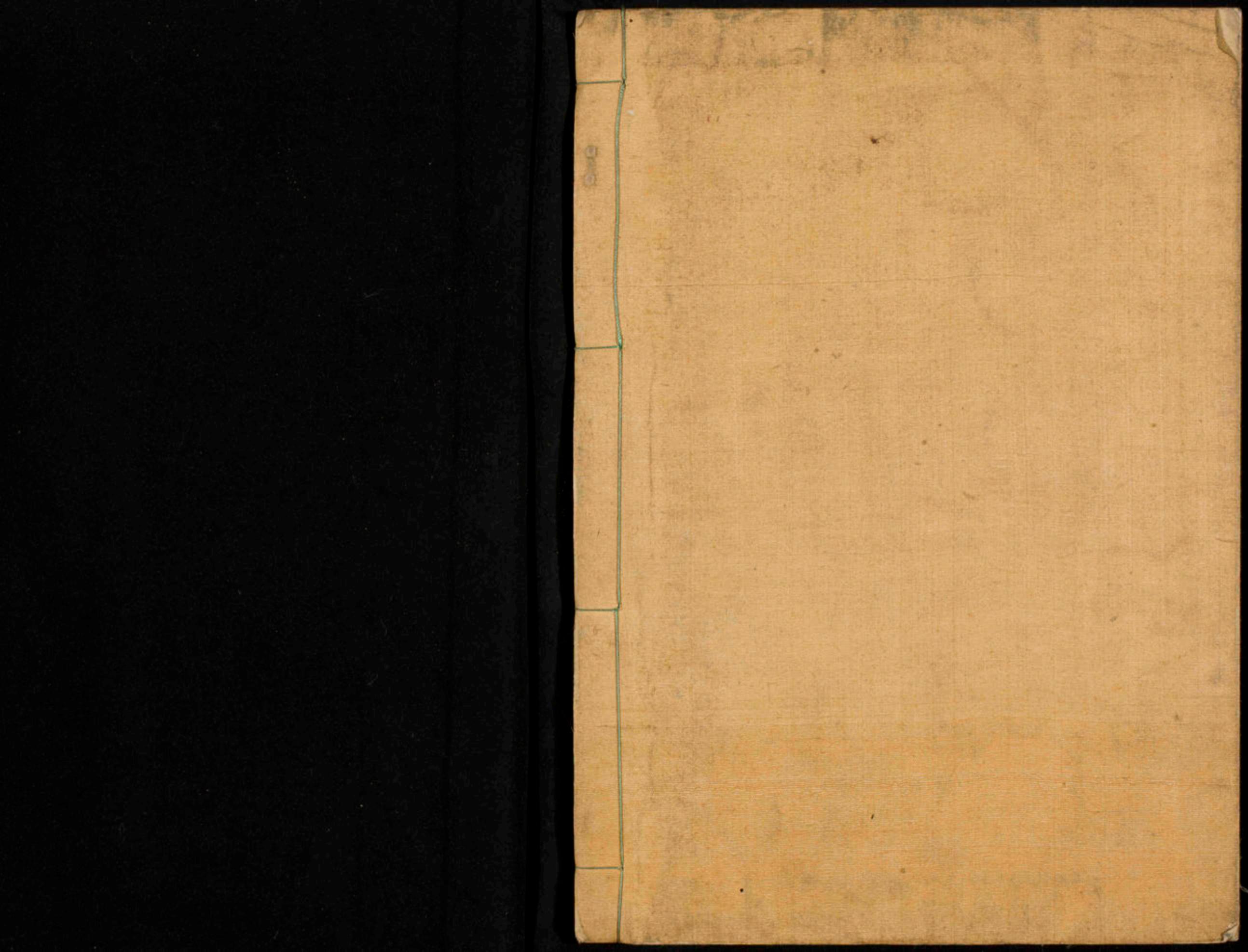
△深川市町衆の皆家を主一保勢屋の金ニケル様
と志水取行村々も今後の發札並代出^{代出}をより人まちかく五日の日付迄
けども往來の度^度にてやうく人をやむお危と取廻させらるふ一人の男を添
シテ^{シテ}各又本がんの見^見と引出^{引出}けまほ當者ては男目とひく死^死を見えとし
度^度に何處^{何處}するぞと云ふはく跡あきをまよう古中ゆゑ一併と尋るみちのちの
彦^彦と押佐^{押佐}とヤマカガ^{ヤマカガ}とあつま處^處のゆをあらざりとひくえを高^高て奉^奉すも
内容^{内容}の正^正あつてものも憲^憲キ^キ一凡此^此の天变^{天变}小舟^舟賤^賤き^きの相^相業^業客^客万人と
之^之を買^買とあらざりと云ふが弟世^{弟世}の魚穀^{魚穀}か^かと脱^脱げたりのくふ共^共のびとく
土中^{土中}ふ埋^埋て日寂^{日寂}と云ふ金^金守^守ありの西^西是^是ス善^善果^果の因縁^{因縊}や^やていくる死^死
や入^入る生命^{生命}を失^失なすあー今^今眼^眼の純^純朴^朴ありハニ海北^{海北}島^島丁^丁與^與斧^斧引^引初^初一部^{一部}
家^家金^金機^機舊^舊と云う腰^腰掛^掛もあつ其^其支^支拂^拂ハ安全^{安全}や^やて毛^毛皮^皮羨^羨慕^慕る玉^玉一毛^毛皮^皮因^因



あきを眼中とする所何生も強かく
沙原ア各忙然として憚るのみ
此義トモ常ニおれは甚大不器
ま魚ハ水中を度て水をすくひ人ハ魚
ほしてらむとあるぞ若人水中に魚入水
多く呑て腹中よりの満る所へ及ぶや
物の如ドク丸山太穴巻本今筆

徳情の敵である。有病のもの何を醫も療へ医事と醫本筋を失う
お性へからと要ド大變に處せば苦痛百倍ふして死んでる裏小牘てと
心中お勤まつてお世を守るの災害が生じて國之後世の樹木とモ

向西京町事ひ久を藤と申と限ふ日本也乞延年一月うちす地農水て長
三弓又ハス弓も織す共アテ足セ備述勤ムラシムギ甚うち郭の火と田丁の
火の木くあまたひセんと足ノ所一人の壯士奉アケ火モト止て云我あ
被のり、物合モ而の金百両を手を云不は男令持て云と捨退御不被助ト
多め高懐より紳本を立勤一令と擇居仕去志の悪ひをうれ布ヨリ
たう終おまきを致スル本モ妙文帝紙の墨要あるを云て右幽考に十月九日不
正捕多羅知御室の石あせ文江代後の事ひあらタメ一暮ぐ化の難ミテ皆
其死生を起さるるを報ひ一紙半張の筆を文江正と先善根と稱を以
て重を以て何と不來タメ



129
6
3

安政見聞錄

下

